

第六十八章 善為士

よく士たる者は武（たけ）からず。よく戦かう者は怒らず。

よく敵に勝つ者は争わず。よく人を用うる者は下となる。（へりくだる）

これを争わざるの徳という。これを人を用うるの力という。これを天に配すという。（配天、天の与え）

古（いにしえ）の極なり。（古の極、最高理想）

〔訳者註〕

これは最高理想の表示である。老子は自然は天と同じであり、古代の徳は最高だったと思った。

第六十九章 用兵有言

兵を用うるに言えることあり、われは敢えて主とならずして、客となり、敢えて寸を進めずして、しかも尺をしりぞくこと
これを行くに行（こう）なく、壊（かかぐる）（壊はひじまくり）に臂（ひじ）なく、

仍（突く）に敵なく、とるに兵なしという。
禍は敵を軽（かるん）ずより大なるはなし。
敵を軽ずるはわれの宝を失うに幾（ちか）し。
故に兵をあげて相加うるにあわれむ者は勝つなり矣（い）。

〔訳者註〕

軍隊を指揮するのは挑戦者になることである。殺人はみづから道德にまけることである。

第七十章 吾言甚易知

わが言うことは甚だ知りやすく、おこないやすきに、
天下はよく知ることなく、よくおこなうことなし。

言には宗（そう、主旨）あり、事には君（主人、主意）あり。
それただ無知なり、これを以てわれを知らざるなり。

われを知るものはまれならば、すなわちわれは貴（たつと）し、矣。
これをもって聖人は褐（かつ、ぼろ）をきるも玉をいだくなり。

〔訳者註〕

ぼろを着ても宝ものである精神を失うな。

第七十一章 知不知

知りて知らずとするは上にして、知らずして知るとするは病（へい）なり。（病は心の禍、なやみ）

それただ病を病とする。これをもって病ならず。

聖人の病ならざるはその病を病とするを以てなり。

これをもって病ならず。（知らぬことを知ったふりをするのが病である）（なやみを知らないと思えば病はなくなる）

〔訳者註〕

肉体の病気は心の悩みであり、災であり、悲観である。よって災を静めるために悩みをすてよ。

第七十二章 民不畏威

民、威をおそれざれば大威は至らん、矣。(威、権力・強権)
そのおるところをせましとするなかれ。
その生とする所をいとうなかれ。

それたまいとわず、これを以ていとわざるなり。(家がせまいと思うからせまいのだ)
これを以て聖人は自ら知るも自ら見(あらわ)さず。
自ら愛するも自ら貴(たつと)しとせざるなり。

故にかれを去り、これを取る。(道に安んじ、天を楽しみ、自らを愛してもほこらない)

〔訳者註〕

政府の権力の脅迫的威信を恐れるな。恐れると彼らはいくらでもつけ上がる。レオ・トルストイは「貧乏人が牛を室に入れて暮した後に牛を出すと家が広くなる」話を作ったのはこの線であった。

第七十三章 勇於敢

敢に勇なればすなわち殺(ころ)される)。

不敢(むりをしない)に勇なればすなわち活。(いきいきさせられる)

この両者は或は利にして、或は害なり。

天のにくむところいづれかそのゆえを知らんや。

これをもって聖人もなおこれを難(がた)しとすることし。(猶、猶……ごとし)

天の道は争わざるもしかよく勝ち、

言わざるもよく応じ、召(まね)かざるもしかおのずから来り、

せん然(せんぜん、公平な)たるも、しかもよく謀(はか)るなり。

天網(てんもう、天のあみ)は恢恢(かいかい、広くあみの目はまばら)なれば疎(そ、荒い)なるも失わざるなり。(天のあみは目は荒いようでも捕らえそこなわない)

〔訳者註〕

自然の目的はわかりにくい、道によれば敢行しないことに勇気があり、謙遜で争わないことが真理である。よって自然は獲物を失わないのである。

第七十四章 民不畏死

民、死をおそれれば、奈何（いかん）して死を以てこれをおどさんや。もし民をして常に死をおそれしめ、

しかして奇をなす者をわれ執（とつ）て殺すことを得ば、たれかあえてせんや。常に殺（さつ）を司（つかさど）る者ありて殺す。（司る、とり扱う）

それ殺を司る者に代つて殺すことを、

これを大匠（たいしょう、職人の親方）に代つて劉（けづ）るというなり。

それ大匠に代つてけづる者は手をやぶらざることあるは希（すくな）し。

〔訳者註〕

死刑反対と人による人の裁判と刑罰の全面的否定である。罪悪は権力者の作り出したものだ。その者に罪人を刑する資格はないのだ。

第七十五章 民之飢

民の飢ゆるはその上の税を食（はむ）ことの多きを以てこれを以て飢ゆるなり。

民のおさめ難きはその上の（上、かみ、政府、権力者）なすこと有るを以て、これを以ておさめ難きなり。

民の死をかるんずるはその生を求むること、これ厚きを以て死をかるんずるなり。（八〇章参照）それただ生を以てなすことなき者はこれ生をたつとぶに賢（まさ）れり。（生きてゆくことに熱心でない者の方が結局長生きできる）

〔訳者註〕

ここに租税に反対する思想と、生死の哲学の率先した記述がある。生をたつとび（厚生）、死を軽視することは人為によらずに自分を生かすべきことを意味し、人は自然の年令寿命をたのしめということである。

第七十六章 人之生也

人の生まるるや、柔弱にして、
その死するや堅強なり。

万物草木の生ずるや柔ぜいにし、
その死するや枯稿（ここう）す。（かれて、かたくなる）

故に堅強なるものは死の徒（なにかま）にして、柔弱なる者は生の徒（と）たり。

これを以て兵つよければすなわち勝たず、

木強ければすなわち共（きょう、切）って組合わす（せ）られる。

強大は下に處（お）り、柔弱は上におるなり。

〔訳者註〕

自然の摂理は人為をこえて万物を平等化している。自然の教える平等と相互扶助の原理である。

第七十七章 天之道

天の道はそれ猶（なお）のごとし。弓を張るときか。（弓につるを張るようなものだろう）

高きものはこれを抑（おさ）え、ひくきものはこれを挙（あ）げて、

余りあるものはこれを損（そん）じ、足らざるものはこれを補うなり。（弓の竹の高い方をさげ、ひくい方を上げてつるを張るとびんとしてつるがまっすぐに一直線になる）

天の道はあまりあるを損じて、足らざるをおぎなうも、

人の道はすなわち然らず、足らざるものを損じて、以て余りあるに奉ずるなり。

たれかよく余りありて天下に奉ぜんや、ただ有道者のみなり。これを以て聖人は為（な）すもし

かもたのまず、功成るもおらず、（二、二四章）

そは賢を見（あらわ）すことを欲せざるなり。（人間社会の不平等を張る力学に仮説をして有道者の謙讓の美德を説く）

〔訳者註〕

これが宇宙と人生の哲学である。道に従う人だけが自然を体験することができる。故に仁とか人の道と名づけるものはここに原動の人為の力、すなわち私有財産と社会階級をもって始めての抗議が出たのである。

第七十八章 天下柔弱

天下の柔弱は水にすぐるはなし、しかして堅強をせむる者にして、よくこれにまさることなきは、以てそのこれに易（か）うることを以てなり。（水はやらかいものだが、又水ほど堅いものに強いものはない）

弱の強に勝ち、柔の剛に勝つことは、天下に知らざるものなきも、よく行うものなし。

故に聖人はいえり、国の垢を受くるこれを社稷（しゃしよく、古い社会組織）の主といい、国の不祥（不吉）を受くる、これを天下の王という。（国王が国の不幸の責任をとる）正言は反するがごとしと。（正しいことばは時に反対にきこえることがある）

〔訳者註〕

水力学についての古代の驚くべき祖述である。統治者はだれよりも謙遜であるべきだ。高所から落ちる細水が鋼鉄を粉碎する実例がある。

第七十九章 和大怨

大怨（だいえん、大きなうらみ）を和するも必ず余怨あり。

安（いずくんぞ、どうしてそんなことがあるうか）、以て善をなすべけんや。

これを以て聖人は左契（さけい）を取って、（契は古代中国人が約束した時に、竹を二つに割って、その左のを義務ある人が取り、右は権利のある人が取って、約束をはたす時に合せてみて証拠としたもの。割印と同じ）、しかも人を責めず。

有徳は契を司（つかさどり）、

無徳は徹（てつ、法律、規則）を司どり、

天道には親なし、（特に不公平に親しむ人はいない）、常に善人に与（くみ、味方）す。

〔訳者註〕

契は古代中国の割符で右の半分の竹片は有権者が取り、左半分は責任者が取った。割目を合して見て証明とする。憎みでは問題は解決できないが、（三十六章参照）公平な道の徳だけが宇宙の本質である。

第八十章 小国寡民

小国にして寡民（かみん、少しの数の人民）、什伯の器（じゅうはくのき、十人の長、百人の長たるべき人物）あるも、しかも用いざらしめ、民をして用いざらしめ、（使、 $\vdots$ をして $\vdots$ せしむ）民をして死を重んじて、しかも遠く徒（うつら）ざらしめ（遠くへ移住させない）、舟輿（しゅうよ、舟と乗りもの）ありと雖もこれに乗るところなく、甲兵（こうへい、武装した兵隊）ありと雖もこれを陳（ならぶ）る所なからしめ、民をしてまた縄を結びてこれを用いしめん。（結縄、文字の代りにした結びめの暗号）その食をうましとし、その服を美なりとし、その居（きよ、住所）をやすしとし、その俗（ぞく、風俗）をたのしみとし、隣国あいのぞみ、鶏狗（けいく、とりや犬）の声あいきこゆるも、民は老死に至るまであい往生せざらしむ。

〔訳者註〕

これは老子が考察した理想の社会の最小単位の生活の空想描写である。土着民と社会単位の自由連合体であって、平和主義社会を表現している。又、漢民族の代表的国民精神ともいえる。

第八十一章 信言不美

信言は美ならず、美は信ならず。
善者は弁ならず、弁者は善ならず。
知者は博（ひろ）からず、ひろき者は知らず。
聖人は積まず、ことごとく以て人のためにして、おのれはいよいよ有す。
ことごとく以て人に与えて、おのれはいよいよ多し。
天の道は利して害せず。
聖人の道はなして争わざるなり。

〔訳者註〕

理想の人物は自分のために蓄えない。そのような無私のところが他人と争う原因を自然に作らないのである。